

筒井順永

筒井四郎（定次）

一、大和国添下郡に筒井順政・順興・順慶という者がいた。筒井は興福寺の衆徒の家であつた。彼らは昔から筒井に城を構えて住んでいた。領地は六万石余りであつた。特に応仁年中（一四六七〜一四六九）から天正（一五七三〜一五九二）の初め頃までは、国侍はそれぞれ独立心があり、戦の絶えない国となつて、各地で合戦がやむことはなかつた。筒井順慶は武芸に秀で、一族郎等が多い人であつたので大半の地方武士を従属させていた。

織田信長が畿内を支配した時、順慶は明智光秀を頼つて信長に仕えた。そして松永久秀を倒し、大和国中を支配し、大和国の頭領となつた。順慶と松永のことは後述する。

その後、天正十年（一五八二）六月、明智光秀が謀叛を起こした時、光秀は順慶に使者を送り、次のように伝えてきた。

「信長に恨みがあり、本能寺を急襲して信長を自害に追い込み、その後二条の屋敷へ攻め入り、織田信忠をも自害に追い込んだ。長年の盟友を頼むのは今この時である。味方をしてくれれば本望である。その褒美として大和・紀伊・和泉の三ヶ国を差し上げよう」

順慶は家臣を集めて相談をした。意見が様々に出たが、家臣が各々いうには「明智に味方するのが当然である」ということであつた。しかし、松倉重信は次のように忠告した。

「まず、明智に出陣をする旨の返事をし、そして八幡山まで出馬をする。八幡山は險しく、敵の侵入を防ぐには良いところであるから、暫くその場に陣取つて様子を見るのが妥当である。恐らく羽柴秀吉は中国地方における毛利攻めから戻つてきて明智を討伐するであろうから、頃合いを見計らつて秀吉側へ密かに味方し、明智を裏切るのが得策であろう」

これによつて、順慶の出陣が決定した。順慶はこの旨を各々に通知した。そして一万人数りの軍勢で八幡山に陣取つていたところ、予想通り秀吉が中国地方の毛利氏と和議を結び、撤退して尼崎へ帰つてきた。順慶は森好高を使者として秀吉のもとへ送つた。その内容は「（秀吉の）味方として着陣した。明智を裏切ろう」というものであつた。秀吉は「もつともな意見で満足に思う。一層